

第28回里山一斉調査報告

報告：常俊容子

(NOB、里山委員会、野生シカ調査会)

春恒例の保全協会主催行事、第28回「里山一斉調査ー観察しながらウォーキング」は2010年4月11日11コース、18日2コースで実施（コース名は確認表参照）、11日の朝方はかなりの降雨でしたが、幸い開催時には回復、殆どのコースで雨具が登場することはなかったようです。しかし天候を危ぶんだキャンセルもあり総参加人数は例年より少なく、延べ202名（うち小学生以下21名）でした。

エドヒガンからヤマザクラ、カスミザクラにウズミザクラ、コバノミツバツツジにモチツツジなど「今年の開花は早い」「遅い」と、例年ほぼ同時期に開催している行事ならではの報告があります。コース毎にまちまちで、一概に「温暖化」では片付けられない複雑な自然。地域グループの日頃からの継続的な観察によりフェノロジー（生物暦）を把握するのは大変重要なことです。

土地の改変による影響があったのは・・・

「彩都西」の開発が進み緑地はなくなり、特定外来種ナルトサワギクの分布拡大がみられた茨木丘陵・鉢伏山、八尾・高安山では山麓沿いに農道が開通し、また刈り払いでなく除草剤が使用されるようになった影響か、タネツケバナなどが激減、イネ科植物やホトケノザばかりという単調な植生になったとのこと。和泉・松尾寺ではスポーツ公園の整備でシュンラン、キンランや毎年確認されたアカガエルの産卵場所が消え、旧緑資源公社の事業である基幹農道が通り緑地が分断された泉南・畦の谷では昨年来ノウサギ、タヌキのサインが確認できなくなったとのこと。

橋本・玉川峡（和歌山県）は市街地からかなり離れた山里ですが、日本では1992年に初めて報告された帰化種ミチタネツケバナの侵入に驚いた、との報告。在来タネツケバナとよく似ているとのことで、リーダーに専門性があるチームならではの確認でしょう。

今年度は河内長野・天見はスタッフのみで調査するクローズドコースとし、4月18日に実施しました。猟友会の大阪支部長より当地でのシカ目撃情報をいただいております、その確認が主目的です。地元自治会の花見や選挙の公示日とあっていつになく人手が多い中、情報提供者に遭遇し聞き取り、山中では真新しいサインもあり、間違いなく複数頭シカが生息していることを確認しました。

現場は鳥獣保護区ですが昨今の農業被害でイノシシの箱罠による駆除を行っており、シカの誤捕獲の可能性があります。情報提供した本庁からは府出先機関に即刻この旨通達されました。今後のリスクを考慮し、まだ数頭のうちにシカも駆除対象に、という動きがあるかもしれません。在来の野生動物であるシカが自然繁殖していること自体になんら問題はなく、防除や生息地管理に努め、数のコントロールも、という本来の保護管理の基本からは「先制攻撃」は逸脱するように思われます。しかし長らくシカの出没がなかった農林業地帯でもあり、今後高密度になって様々な被害拡大、というストーリーを想定すると・・・難しい判断です。

運営面では、一般ハイカーの問題あるマナーから外来者に敏感になっている地元要充分配慮が必要なコース、R種（絶滅危惧種）の取り扱いに「種名を公表するのは如何か」という意見があるコ

ース、大半が山中一本道であるコースでは、ある程度少人数がベターであるなどの課題があります。

私は3月の生物多様性 EXPO で環境省のブースのジオラマコーナーを担当、大阪市立自然史博物館作成のパネル、引き出しに仕込んだキノコ、諸々幼虫、カヤネズミの巣などの標本や PPT を使い「大阪らしい生物多様性が成立したわけ」を解説しました。来場者は「生物多様性」認知度30数%という日本人の中では自然環境に興味のある層であるといえますが、足元の野生生物（特に哺乳類）に関する認知度は低く、大阪での里山一斉調査の意義は大きいと思いました。

*参考：北摂地域から生駒山系まで、今年も相変わらずイノシシは勢いのある様子。「生駒山系はイノブタ」説に対し、大阪府環境農林水産総合研究所の解析では、交配されたヨーロッパ種のブタDNAは検出されておらず、「現時点でイノブタは確認されない」というのが公式見解です。

「都市と自然」412号 2010年7月号報告記事より転載

